

いのち 〈大火と大水〉

宮前篇

絵：野口宣友

今回からふるさと伝承史をお送りします。

「宮二の3尺道」みんなが特に一番気をつけていたのが(火事)でした。時に昭和14年4月29日午後11時40分すぎでした。折からのフェーン現象で火はみるみる付近民家へと燃え広がります。『火事だア！火事だア！』絶叫が聞こえます。『なんだこりゃ』一雄(かずお)さんは、小さな子供を「頼んだぞー」と妻に託すと炎が舞い上がる外に飛び出した。『みんなに、火事を知らせんといいけん！』宮二にある半鐘台へ一

雄さんは走ります。半狂乱の集落の人々の声が乱れ飛びます。歯を食いしばって半鐘を打ち鳴らす一雄さん。『ジャンジャン』けたたましい半鐘の音が鳴り響きます。そこに飛び出してきた男が半鐘台の一雄さんに下から叫びました。『おうッー(かず)やん早エト「降りない。もうエエ、あッおまえとここに火が移ったッ早く降りろ！』一雄さんは下へ向かって大声で叫んだ『そげなこと、ここから見りゃあよくわかっちゃうがー』『みんなだみんなのだれんもの「命」が「いのち」が一番だッ、早くみんなに知らせねばッ早くッ』半鐘

お話を変わってこんな事件もありました。今度は「大水」です。集中豪雨で増水した小松谷川に小学校4年生の女子生徒が足を滑らし転落して流されました。時に昭和43年7月17日の事でした。そこへ、勤め帰りの新井健次郎さん(当時19歳)と小谷順三さん(当時21歳)のふたりの車が通りかかりました。ふたりは急流に押し流される少女を発見。お互い「なすすきあつた瞬間、車を止めると次々と危険もかえりみず濁流に飛び込みました。大川で泳ぎきたえたふたりは女の子を



雄さんは走ります。半狂乱の集落の人々の声が乱れ飛びます。歯を食いしばって半鐘を打ち鳴らす一雄さん。『ジャンジャン』けたたましい半鐘の音が鳴り響きます。そこに飛び出してきた男が半鐘台の一雄さんに下から叫びました。『おうッー(かず)やん早エト「降りない。もうエエ、あッおまえとここに火が移ったッ早く降りろ！』一雄さんは下へ向かって大声で叫んだ『そげなこと、ここから見りゃあよくわかっちゃうがー』『みんなだみんなのだれんもの「命」が「いのち」が一番だッ、早くみんなに知らせねばッ早くッ』半鐘打つその背で自分の家がついに燃え上がるのが目に入った。『かかア、早く逃げろッー子供たち早く逃げてくれよおまえ頼んだぞー！』心で祈るように半鐘を打つ一雄さん。全焼19戸・半焼3戸・約140の人々が焼出されました。しかし、こんな大きな「火事」になったのにもかかわらず火事で「尊い命」をなくした方は一人もいませんでした。あの半鐘の音は宮二だけではなく会見地区全体に響き渡り、火は翌日午前3時やつと消えました。何一つ荷物を持出すこともなく『人の命が一番』と半鐘を叩いてみんなに知らせた一雄さんの行為は永くほめたたえられるようになりました。



必死で助けあげ、心配して駆けつけた集落の人々たちと一緒に健次郎さん宅へ運びました。彼の父勇さんは元軍医で、適切な救急処置でグツタリとなつた少女は息をふきかえました。『助かった！』駆けつけた母親は涙を流して抱きしめました。心配したみんなも思わずもらい泣きました。元軍医の処置の適切さとわが身を捨てて濁流に飛び込んだ一人の青年が教えた「尊い命」。そののち、町によりこの善行を讃えて健次郎順三さんを表彰されました。この尊い勇氣に町民は、感動し暖かい拍手を送りました。皆さん「いのち」を大切にいたしましょう。 完